▲十五夜の月=1965年

没後50年
いわさきちひろの世界

今年は絵本などの子どもの本を中心に画家として活躍したいわさきちひろの没後50年です。子どもを愛し、平和な世界を願い続けて生きたちひろの人生の軌跡を作品と共に振り返ります。

◀お気に入りの服に身を包んだちひろ=1973年4月

子どもへの愛

▲ロンドン橋がおちる=1966年

▲そっぽを向く少年=1970年

▼そっぽを向く少女=1970年

みんな仲間よ

「『みんな仲間よ』私は自分の心にいいきかせて、なつかしい、やさしい、人の心のふる里をさがします。絵本の中にそれがちゃんとしまってあるのです。そして私が描きかけている絵本のなかにも。だから、私は一年中頭のどこかでいつも絵本のことを考えているにちがいありません。この“絵本のしあわせ”が、みんなの心にとどくように、もし私が死ぬまでこうして絵本をかきつづけていけたとしたら、それは本当に幸せなことです」

「絵本づくりの仕事場より」至光社の絵本にそえて=1972年12月

▲チューリップのなかのあかちゃん=1971年

▲木の葉のなかの少女=1966年

戦後、絵本画家として自立したちひろは、一人の子どもの母親になる。母となった気持ちを「うしおのように流れ出す愛情を、どうしようもなくて」と表現した。その眼差しは、わが子だけでなく、世界の子どもたちに向けられるようになる。ちひろが未来の、そして平和の象徴として描いた子どもたち一人一人に「世界中のこども　みんなに　平和としあわせを」という願いが込められている。

▲雪の日に訪ねてきた娘「つるのおんがえし」(偕成社)より=1966年

ちひろの歩み

- 1918年 0歳 陸軍の建築技師だった岩崎正勝と女学校の教師だった文江の長女として生まれる
- 31年 12歳 自由な教育方針で知られる東京府立第六高等女学校(現・東京都立三田高校)に入学
- 33年 14歳 洋画家の岡田三郎助に師事し、36年までデッサン、油絵を学ぶ
- 第一次世界大戦終結
- 満州事変勃発
- 41年 22歳 画家の中谷泰に師事し、再び油絵を描き始める
- 太平洋戦争始まる
- 45年 26歳 東京・山の手の空襲で自宅を焼失し、長野県松本市の母の実家へ疎開
- 第二次世界大戦終結
- 46年 27歳 長野県で日本共産党に入党。日本共産党宣伝部主幸の芸術学校に入学のため上京。人民新聞の記者としてカットや記事を書く
- 日本国憲法公布　朝鮮戦争始まる
- 50年 31歳 (後に共産党の衆院議員となる)松本善明と結婚。紙芝居「お母さんの話」が文部大臣賞を受賞
- 51年 32歳 長男・猛が誕生
- 52年 33歳 東京練馬区下石神井(現在はちひろ美術館・東京所在地)に家を建て、家族3人で暮らし始める
- 56年 37歳 絵雑誌等に発表した作品が小学館児童出版文化賞受賞
- 58年 39歳 紙芝居「お月さまいくつ」(童心社)を描き、翌年、厚生大臣賞受賞
- 60年 41歳 「あいうえおのほん」(童心社)を描き、翌年、サンケイ児童出版文化賞受賞
- 63年 44歳 世界婦人会議参加のためソビエト(現ロシア)を訪問
- 65年 46歳 「りゅうのめのなみだ」(偕成社)を描き、偕成社の物語絵本シリーズ始まる
- 米国による北ベトナム爆撃始まる
- 67年 48歳 「わたしがちいさかったときに」(童心社)、「うらしまたろう」などを描く。夫・善明が衆院議員となる
- 71年 52歳 「ことりのくるひ」(至光社)を描き、73年ボローニャ国際児童図書展にてグラフィック賞受賞。「たけくらべ」「ゆきごんのおくりもの」(新日本出版社)などを描く
- 72年 53歳 「ひさの星」(岩崎書店)、「ゆきのひのたんじょうび」(至光社)、「母さんはおるすず」(新日本出版社)などを描く。「戦火のなかの子どもたち」を描き始める
- 73年 54歳 「戦火のなかの子どもたち」(岩崎書店)を出版。肝臓にがんが発見され、入退院を繰り返す
- 74年 55歳 8月8日、肝臓がんのため死去。没後、「戦火のなかの子どもたち」がライプヒチ国際書籍展銅賞を受賞

◀アトリエで絵筆を握るちひろ=1968年頃

平和への祈り

ばくだんはかぎりなくふった

赤いシクラメンの花は
きょねんもおととしもそのまえのとしも
冬の私のしごとばの紅一点
ひとつひとつ
いつとはなしにひらいては
しごとちゅうのわたしとひとみをかわす。
きょねんもおととしも　そのまえのとしも
ベトナムの子どもの頭のうえに
ばくだんはかぎりなくふった。
赤いシクラメンの
そのすきとおった花びらのなかから
しんでいったその子たちの
ひとみがささやく。
あたしたちの一生は
ずーっと　せんそうのなかだけだった。

「戦火のなかの子どもたち」(岩崎書店)本文より
文・いわさきちひろ

▲シクラメンの花のなかの子どもたち「戦火のなかの子どもたち」より=1973年

ちひろは、戦時下に青春時代を過ごす。女学校に入った12歳のときに満州事変が起こり、第二次世界大戦が終わったのは26歳のときだった。子どもたちの夢や希望、生命をも奪う戦争の悲惨な現実を目の当たりにした。

1960年代から70年代前半、ベトナム戦争が激化していくなかで、ちひろは戦争をテーマにした絵本を手掛ける。そこには命や平和の大切さ、またそれを守りたいという切実な願いがあった。

自身の戦争体験から「二度と戦争を起こしてはならない」と決意し、平和な世界の実現を願い、その強い思いを多くの作品に込めた。

▲「戦火のなかの子どもたち」表紙=1973年

◀三人姉妹　「母さんはおるす」(新日本出版社)表紙=1972年

◀猫のなかの母と子「戦火のなかの子どもたち」より=1973年

戦争体験があったことが、私の生き方を大きく方向づけている

「青春時代のあの若々しい希望を何もかもうち砕いてしまう戦争体験があったことが、私の生き方を大きく方向づけているんだと思います。

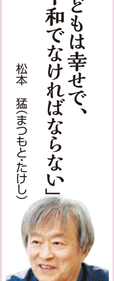
平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます」

「教育評論」1972年11月号

◀風船と舞いあがるバスカル「あかいふうせん」(偕成社)より=1968年

「子どもは幸せで、平和でなければならない」

松本　猛(まつもとたけし)



ちがい犠牲になっていることが報道されていた。母は、絵本画家として戦火のなかにいる子どもたちの悲しみや苦しさを伝えるために、この絵本を制作しなければと考えた。私を手はなく、身近な人を失った子どもたちも犠牲者だということをよく知っていた。絵本を制作していた頃、ベトナム戦争は苛烈を極め、無差別爆撃が繰り返され、罪のない子どもたち

伝わったのは、戦争とは何かを、戦争を知らない世代の私にも考えてほしいという願いがあったからだと思う。

残念なことに、この50年の間、そして今なお、ガザやウクライナをはじめ世界各地では紛争が起こり続け、たくさんの子どもの命が失われている。

没後50年たった今でも「戦火のなかの子どもたち」が出版され続け、いわさきちひろの絵を支持してくれる人がたくさんいるのは、ちひろの作品に美術的価値があるからだけではない。その絵に込められた、子どもは幸せでなければならない、平和でなければならない、という思いを読み取り、共感する人が多いからだろう。

(美術・絵本評論家　ちひろ美術館常任顧問横浜美術大学客員教授)

ちひろの世界へ

安曇野ちひろ美術館
〒399−8501
長野県北安曇郡松川村西原3358−24
電話　0261−62−0772
開館期間　2024年3月1日〜12月1日
休館日　水曜日
(祝休日開館、翌平日休館)
開館時間　10:00〜17:00

ちひろ美術館・東京
〒177−0042
東京都練馬区下石神井4−7−2
電話　03−3995−0612
開館時間　10:00〜17:00
(入館は開館の30分前まで)
休館日　月曜日
(祝休日は閉館、翌平日休館)
※年末年始、冬期休館あり
※展示替えのため臨時休館あり
(10月7日〜11日まで休館)

◀きょうとりと子どもたち=1967年

制作:編集委員　上坂修子　東京デザイン課　東栗里奈　取材協力、写真・画像提供:ちひろ美術館・東京、安曇野ちひろ美術館、公益財団法人いわさきちひろ記念事業団　出典・参考文献:別冊太陽「いわさきちひろ」(ちひろ美術館監修、平凡社)、「いわさきちひろ　子どもへの愛に生きて」(松本猛著、講談社)、ちひろ美術館HPほか